The lady's magazine（ザ・レディス・マガジン）

London ： Robinson & Roberts , 1770－1832

「ザ・レディス・マガジン」は1770年8月にロンドンで創刊され、1832年まで60年余りにわたって継続刊行されてきた月刊婦人雑誌である（本館所蔵は1771－1831年の47 vols.）。衣装を描いた銅版画が時々挿入されたために最初のファッション雑誌ともみなされているが、実際には小説や随筆や書簡を盛り込んだ女性向けの総合雑誌として刊行された時代が長く、毎月定期的にファッション記事やファッションプレートが挿入されてくるのは1800年以後になる。18世紀には同名の婦人雑誌が何度か創刊された。1731年に「ザ・ジェントルマンズ・マガジン」が刊行されて以来その女性版が相次いで登場したからである。しかし生き長らえたのは当雑誌のみである。

1771年1月号　学芸の神ミネルヴァから女性たちに手渡された「ザ・レディス・マガジン」

初期の雑誌タイトルは「ザ・レディス・マガジン、役に立って面白い女性の愉しい友」となっており、印刷元はRobinson and Roberts。1771年1月号巻頭にある挨拶文には雑誌の売行きが驚くほど好調であることに感謝の言葉が添えられており、1775年には「5年間の売上げの伸びは女性の進歩向上を目指した方針が評価されたと考える。知性と教養を高め合うためにもより広く投稿を願う」と結んでいる。20年後には「学習や勉学が女性の素質や感性と両立せず女性のモラルに有害であると考えていた時代は終わった。女性の筆になる本誌の投稿文は優れており読者の提案が改善につながってきた」と読者の筆の力を称えている。随筆や読後感などを投稿して雑誌を支えてきた知性豊かな読者が大勢いたことを示唆している。

1771年4月号の目次から初期の雑誌記事の概略を挙げてみる。センチメンタル・ジャーニー（連載イギリス旅行記）、ピレネーの世捨て人（実話）、オリエント史より、結婚について、自叙伝、危険な快楽、高潔な宮廷人（フランス語）、逸話、投書、詩、楽譜、外国だより、国内だより、慶弔記事、以上で計54ページとなる。価格が6ペンスという安さであるところから中産階級向けの雑誌と位置づけられているが、ほとんどが読者からの投書や投稿文を採用していることを考えると、教養ある思慮深い女性読者の存在が感じられる。上流階級のサロンで知的な女性たちのディスカッションから生まれたブルーストッキングの自由な発想や発言の影響が、中産階級にも及んでいた現象があらわれているともいえる。

“ザ・マトロン（The Matron）”と題した質問・相談欄が始まったのが1774年1月号。この欄は恋愛・結婚・教育・家族関係・服装・マナーなどに関する読者からの質問にミセス・グレイが答える

1815年3月号のファッションプレート
ディナードレス

という形式で始まり、17年間も続いた息の長い人気欄でもあった。投書者は裕福な商人から小売商、彼らの妻や娘、家庭教師などが多く、相談内容とそれに答えるミセス・グレイの冴えた判断とユーモアが小気味よい。服装に関連した投書を挙げてみると、ラニラ公園で出会った粉屋の娘が身分不相応なドレスを着ていたことに怒りをあらわす社交界の女性（1774年6月）、従来は室内着であったジャケットとペティコートの組合せを、流行だからといって自分の娘がその姿で外出することに憤慨する父親（1778年8月）、乗馬もできない妻が流行の乗馬服を着て毎日過ごすことに不満な軍人の夫（1783年4月）、油屋の女将さんがシュミーズ・ド・ラ・レーヌ（chemise de la reine）とかいう薄くて白い服、それも油屋では汚れやすい服を着はじめたことに怒っている亭主（1784年2月）、スペインの国王が亡くなって宮廷が喪に服したからといって自分の妻や娘までが喪服を新調したいと言い出して驚いている小売商の主人（1789年1月）などなど、ミセス・グレイ宛ての苦情や難問はさまざまあり、それが当時の世相を表わしてもいる。服装史の視点から見ると中産階級の上昇志向や流行への反応や広がりの素早さを証言する資料ととらえることもできる。隣国のフランス王妃マリー・アントワネットから流行したシュミーズ・ド・ラ・レーヌ（王妃のシュミーズ）が早くもロンドンの油屋の女将さんにも伝わり、また庶民まで王室に合わせて喪服を着るという風潮に、18世紀後期のイギリス中産階級の勢いや自負が感じられる。

衣装論にあたるエッセーは時々出てくるが、上流階級の派手さに対して簡素さ（simplicity）こそが中産階級の基本であるとする考え方が根強い。しかし19世紀に入ると「その虚しさを思えば流行は馬鹿げたものであるが、その中に目も奪われる魅力があることも確かだ。流行の助けがなければ若さと美は勝ち取れない。生き生きしたファッションでなければどの集まりにも恥ずかしくて出られない」（1804年1月）と、逆らえない流行の活力に気づいてくる。安くて豊富な布地が店にあふれドレスメーカーで働く小ぎれいなお針子の姿が街の新しい風物になっていた時代でもあり、流行は利潤を生むという意識も当然生まれていた。

19世紀初期には「ラ・ベル・アッサンブレ（La Belle assemblée）」やアッカーマン（Ackermann）の「ザ・リポジトリー・オブ・アーツ（The repository of arts）」など、紙質も良くサイズも大きく、内容の豊かさやファッションプレートの美しさにおいて「ザ・レディス・マガジン」をはるかに凌ぐ女性誌が登場する。創刊から40年を経た1811年に「ザ・レディス・マガジン」は値上げを断行し、流行を意識した“ロンドン・ファッション”の記事とファッションプレートを毎号掲載するようになる。1820年代にはファッションの情報量を増やしファッションプレートも2枚にする対策をとったが、目次の内容はしだいに単調となり読者を啓発するような意気込みは失われていった。1832年には「The ladies museum」と合併し、廃刊の道をたどる。（辻　ますみ）